

「若手」のリーダー石井さん

杉橋 隆夫

石井美桑雄教授が5月の連休初日に倒れられ、重篤な状態にあるとの電話を受けて耳を疑った。電話の主は「石井先生」とだけ告げたので、思わず「石井先生って（誰）？」と聞き返したほどである。しかし、すぐに、かねてよりの心配が、恐れが的中したような、妙な気分襲われた。定年を目前にして重病に伏した先人を少なからず知っており、みずからの戒めとしていたつもりだったからだ。見舞の機会も得ないまま、6月7日の告別式を迎えてしまった。

石井さんは私よりも1歳年上、立命・文学部への着任は1年早かった。だから石井さんは、私たちの世代のリーダー的存在であり、文学部若手教員の親睦団体を発足させた時、「青麦会」と名付けたのも石井さんだった。この会は、長老教授たちから、法学部の「若手懇」と同様の機能を持つのではないかと警戒されたが、文字通りの親睦団体で、年に1・2回、宴を催したにすぎない。それでも、偶に学部長が一升瓶を持ち込んだり、金一封を届けられたりしたのは不思議だった。結局「青麦会」は、私たちが「若手」でなくなるのと並行して疎かになり、次世代に受け継がれることなく自然消滅してしまったのは残念でならない。

石井さんは、服装もしぐさも、体軀もスマートでダンディーだった。なるほどこれが上智大学出身のドイツ語の先生かと肯かせた。アスコット・タイがよく似合い、洒落たジャケットを着こなしていた。やや濃いめの色のレンズが入ったメガネも嫌みではなかった。机を拳で軽く叩いて賛意を表す所作は、ドイツ仕込みだったのだろう。

この文章を書くにあたって、石井さんの論文を読み返してみた。『立命館文学』の「佐々木康之教授退職記念論集」（567号、2001年2月）と「神保菘教授退職記念論集」（573号、2002年2月）に掲載された論稿「ゲオルク・ビューナー『レンツ』のために」(二)・(三)である。この2論文は、当時学部長（人文学会会長）として各々に序文を寄せさせていただいただけに印象深い。もっとも、佐々木先生のご定年を「二〇〇〇一年」とする誤植を見逃したのは汗顔の至りであり、佐々木先生をはじめ、関係各位にこの場を借りてお詫びしておきたい。

肝心の論文の方だが、わずか23歳で逝った孤高の天才が記した「狂気」の作品の全貌を、徹底的に分析し尽くそうとしたものと思われる。前論は第二章の第二・三節、後論は第三章の第一節に相当することが明記され、しかも各々が30頁を超える作品だから、多分、やがて大著を上梓する構想の下に、鋭意筆を進められていたのであろう。未完に終わったのだとしたら、さぞかし心残りであっただろうと惜まれる。文章にも気迫がこもっている。必ずしも常用とはいえない漢語が随所にちりばめられ、日頃厳密なことば遣いと表現に意を用いていた、ありし日の石井さん姿を彷彿とさせる。

抜群の記憶力と先例の悉知については、これを自他ともに認め、学内情勢にも明るく、議論の最中に大いに助けられた。ただ私のような「文献史学」の立場から、伝来「史料」で確認してみると、「記憶」や「先例」との間に多少の齟齬がないではなかったようだ。しかし石井さんは、最後の最後

まで、私たちの世代のリーダー的存在だった。その発言は常に重んぜられた。先に逝って私たちを見守り、できれば当分来ないように計らってほしい。お願いします。

合掌

(本学文学部教授)